

自分が進んできた道 ～振り返って考えると～

学校教育課 指導主事 熊本万理子

生きていく中で誰しも、何かを選択しなければならない場面が多々あります。そのとき、何となく決めていくようで、実は、自分の潜在意識や過去の経験が選択に大きく影響しています。それは意識しているときもあれば、そうでないときもあります。これまでの自分の経験を振り返りながら述べてみます。



例えば、現在私が教職の道を進んでいるのもその一つです。小学校に上がった頃から、親戚が集まったときは、子ども同士で「学校ごっこ」をして遊んでいました。当然のように年上だった私が先生役をしていました。その当時出会った先生が私にとって、信頼でき存在感あるものだったのだと思います。そして、そこから教師という職業に興味を抱くようになり、将来自分がなりたい職業（夢）となっていったように思います。実際は当時出会った先生の影響からか「小学校の先生」→「中学校の音楽の先生」→「中学校の数学の先生」と変化していったように思います。

しかし、高校生頃になると様々なものを通して様々な情報を得るようになり、将来の職業（夢）に少しずつ変化が生じ、教師以外の職業に興味を持つようになりました。結果的には現在、中学校の理科の教師としての道を歩んでいます。

中学校に勤務して最初の部活動は吹奏楽部顧問でした。顧問として、様々な場面でタクトを振ることになりました。そう言えば、小さい頃にテレビでオーケストラの演奏を見ながら、指揮者のように近くにあった棒や箸を振っていた自分があったことを思い出します。また、30歳の頃、特別支援学級の担任になる機会を得ました。中学生の頃のことを思い出しました。自分の学級には、いつも特別支援学級の友達がいって、連絡したり授業があるときには迎えに行ったりしていました。加えて、大学時代には特別支援学校の教諭の免許も取得していたこともあり、その時が来たのだなあと改めて思いました。ソフトボール部の副顧問になったときに思い出したことは、小学校のクラブ活動でソフトボールを選択していたということです。

こう振り返れば振り返るほど、幼保小中学校時代の様々な出会いと経験は人生に大きな影響を及ぼすことを改めて感じました。教師として、様々なことを吸収する時期にある子どもと接している私たちは、それを何時も忘れてはいけなく、未来へ続く時間を共に過ごしていることを意識しておかなければならないということです。何気なく発した言葉も、彼らにとっては影響を受ける言葉になることもあります。つまり、私たちは教師である前に一人の人間として恥ずかしくないよう常に成長していかなければならないと考えます。

最後に、そんな自分を振り返るとき、ココ・シャネルが遺した名言「20歳の顔は自然が作ったもの、30歳の顔は生活が作ったもの、50歳の顔は自分が作ったもの」を思い出します。果たして、自分は味がある顔になっているのでしょうか



1 ゲーム依存症とはなにか

ゲーム依存症とは「ゲームに依存することによってさまざまな弊害を引き起こす」心の病である。ちなみに依存症は三つに分類される。「物質依存症」「プロセス依存症」「関係依存症」である。物質依存症とはアルコール依存症や薬物依存症が代表的なものである。関係依存症とは互いに傷つけ合うにもかかわらず、離れることができない人間関係、例えばDVを指す。ゲーム依存症はプロセス依存症の一つである。仕事、ギャンブル、買い物などのプロセスから生じる興奮や高揚感によって依存症になるものである。

2 ゲーム依存症の症状

① 生活状態の変質

食事、風呂、睡眠時間は短縮される。友人とのつきあいは減り、他の趣味には目も向けなくなる。学校では遅刻や欠席、早退が増え、成績が下がり、しだいに不登校に陥る。ひきこもりがちな生活になる。

② 家族関係の悪化

家族には心を閉ざし、話す機会が減る。唯一、ゲームソフトやアプリを手に入れようとするときには、金を要求し、実現できない場合には家族の金を無断で持ち出し、あるいは利用料金を家族の口座から引き落としにすることもある。

③ 精神状態の開悪化

ゲームに熱中するあまり疲労がたまるので、集中力が低下して、散漫な状態になる。人と話す機会が減り、柔軟な思考やみずみずしい感情表現が損なわれる。このため、ささいなことで、感情が爆発して暴力や暴言に及ぶ場合がある。

3 ゲーム依存症の予防

ゲーム予防のキーパーソンは親である。それは親が子どもに対して最も影響力をもち、子どもがゲームに親しむ前から心を育てることができるからである。ゲーム依存症に対して親の基本的な役割は三つある。

役割1： ゲームより楽しいことを子どもに教える

子どもが小さいころから寄り添い、一緒におしゃべりをして、おしゃべりの楽しさを伝える。

役割2： 親が手本を示す

ゲーム好きな親であれば、ゲームと家庭生活とのバランスがとれた姿を見せる。

役割3： 子どもをむやみにゲームに近づけない

低年齢からゲームを始めると依存症になり易い。ゲームを欲しがった時に、親子で話し合う。

学校教育再設計の可能性

学校教育課 学校問題解決サポート相談員 杉町靖彦

佐賀市小中学校が抱える課題として、今年度、小学校 20 校、中学校 14 校が「不登校」を挙げ、それぞれの学校で真摯な取り組みがなされていることには、頭が下がる思いである。しかしながら、その成果をなかなか見いだせないのも現状であろう。

ここに、出現率 4.36%から 2 年間で 2.02%まで引き下げた学校の取り組みを紹介する。その学校は、職員全員を教育相談・学習指導・学級経営の三部会に組織し、以下のような実践を重ねたとのことである。(保阪亨著「学校を欠席する子どもたち」より)

1 教育相談部の活動

- ①学級担任を中心に、その子どもと接触する機会の多い教員でチームを作り、集団で対応する体制を整える。
- ②学級担任が、積極的に家庭訪問を行って家族との連絡を密に取り、そのうえで事例検討会を重ねる。
- ③「悩みや不安についての調査」を実施し、それに基づいて教育相談週間を設ける。(年 2 回)

2 学習指導部の活動

- ①学力不振の実態を捉え、教師間の共通理解を図る。
- ②具体的な目標を立てて継続的な指導を行う。
- ③主要教科の自主的な補修を行う。
- ④定期テスト前に「助け合い勉強会」を実施する。

3 学級経営部会の活動

- ①担任の得意とする分野・持ち味で積極的に学級作りを進めていくことを確認する。
- ②グループエンカウンターを、年間を通して実施する。
- ③学級内の係活動と生徒会専門委員会の活動を、組織的に連動させた全校的活動に取り組む。
- ④集団不適応傾向の子どもに対し、多面的に援助する。



この実践が語るところは、子どもが示す不適応を、関係がもたらす不適合と捉え直した上で、学校教育を再設計する意義や効果性ではなからうか。